

耶穌降生千八百八十六年 米國聖書

舊約 聖書

亞麻士 阿巴底亞 米迦翁 哈拿巴

書

明治十九年

日本橫濱印行

02-KI

海老澤文庫



曳ゆきてて色をエドムお付せり七我ガザの石垣の内火を遣り  
 一切の殿を焚んハ我アシドレ中より居民を絶のろきアシ  
 クロンの中より王の杖を執る者を絶除かん我また手を反てエ  
 ふ○九エホバかく言たまふ、ツロの三の罪あり四の罪あれバ我  
 らす之を罰して赦さじ即ち彼らと俘囚をことくエドムに  
 付しまた兄弟の契約を忘れたり十我ツロの石垣の内に火を遣り  
 一切の殿を焚ん○十二エホバかく言たまふ、エドムの三の罪あり四  
 の罪あれバ我かあらず之を罰して赦さじ即ち彼ら劍をもてるの  
 兄弟を追ひ全く憐憫の情を断ち恒に怒りて人を害し永くろの償  
 恨をたくりへたり十三我テマンお火を遣りボツラの一切は殿を焚  
 ん○十三エホバかく言たまふ、アンモン人々ハ三の罪あり四の罪  
 あれば我かあらず之を罰して赦さじ即ち彼らろの國境を廣め

んとてギレアデの孕める婦を割たり十四我ラバの石垣の内火を  
 放ちろの一切の殿を焚ん是ハ戰鬥の日に呐喊の聲をもて爲れ暴  
 風の日に旋風をもて爲れん十五彼らの王の牧伯等と諸共お擄  
 へられて往んエホバこれを言ふ、

第二章

我かあらず之を罰して赦さじ即ち彼らエドムの王の骨を焼て灰  
 とあせりニ我モアプに火を遣りケリオテの一切の殿を焚ん、モア  
 プの躁擾と呐喊の聲と喇叭の音の中に死んニ我ろの中より審判  
 長を絶除さるの諸の牧伯を之とよみに殺さんエホバあれを言ふ  
 ○四エホバかく言たまふユダと三の罪あり四の罪あれを我かな  
 らす之を罰して赦さじ即ち彼らはエホバの律法を輕んじろの法  
 度を守らずろの先祖等が従がひし偽の物お惑いさる五我ユダお  
 火を遣りエルサレムの諸の殿を焚ん○六エホバかく言たまふ、

スラエルの三の罪あり四の罪あれバ我かあらず之を罰して赦さ  
 し即ち彼らの義者を金のために賣り貧者を鞋一足のため賣る  
 七 彼らの弱き者の頭あ地の塵のあらんとを喘ぎて求め柔かき者  
 の道を曲げまた父子ともに一人の女子に行て我聖名を汚すハ彼  
 らの質に取る衣服を一切の壇の傍あ敷てるの上に偃し罰金をも  
 て得たる酒をろの神の家あ飲むハ爾あ我ハアモリ人を彼らの前  
 に絶たりアモリ人ハろの高さあど檜樹のごとくろの強さあど椽  
 の樹のごとくありまが我ろの上の果と下の根とをほろぼしたり  
 + 我ハ汝らをエシプトの地より携さへのぼり四十年のあひだ荒  
 野あれいて汝らを導びき終あアモリ人の地を汝らあ獲させたり  
 七 我ハ汝らの子等の中より預言者を興し汝らの少者の中よりナ  
 ザレ人を興したりイサエルの子孫よ然るにあらずやエホバあ  
 れを言ふハ然るに汝らハナザレ人に酒を飲せ預言者あ命じて預

言するなかれと言ハ十三視よ我麥束を積滿せる車の物を壓するガ  
 ごとく汝らを壓せん十四ろの時ハ疾走者も逃るに暇あらず強き者  
 もろの力を施てすを得ず勇士も己の生命を救ふあど能ハらず十五  
 を執る者も立あどを得ず足駛の者も自ら救ふあたハ馬に騎る  
 者も己の生命を救ふあど能とす十六勇士の中の心剛き者もろの日  
 には裸にて逃んエホバこれを言ふ


 一 イサエルの子孫よエホバが汝らにむかひて言ところ

我ガエシプトの地より導き上りし全家にむあひて言ところ此  
 言を聴けニ地ハ諸の族の中あて我たが汝ら而已を知りあの故に  
 我あんぢらの諸の罪のためあ汝らを罰せん三二人もし相會せず  
 ハ争で共に歩かんや四獅子もし獲物あらずバ豈林の中に吼んや  
 猛獅子もし物を攫まらず豈の穴より聲を出さんや五もし罽の  
 設あくを鳥あに地に張る網ああらんや網もし何の得るところ

も無を豈地よりあがらんや。六邑にて喇叭を吹を民おどろかさ  
 んや。邑あ災禍のおこるの。エホバのこれを降したまふあらずや。七  
 夫主エホバのの隠たる事をの。僕ある預言者お傳へずしての  
 何事をも爲たまひざるあり。八獅子吼ゆ、誰か懼れざらんや。主エホ  
 バ言語たまふ、誰か預言せざらんや。九アシドドの一切の殿お傳へ  
 エシプトの地の一切の殿に宣て言へ。汝等サマリヤの山々お集り  
 ろの中おある大ある紛亂を觀ろの中間におこるる。十虐遇を觀  
 よ。十一エホバいひたまふ、彼らの正義をおこるふことを知す。虐たげ  
 取し物と奪ひたる物とをろの宮殿に積蓄はふ。十二是故お主エホバ  
 かく言たまふ。敵ありて此國を攻かてみ。汝の權力を汝より取下さ  
 ん。汝の一切の殿の掠めらるべし。十三エホバかく言たまふ。牧羊者の  
 獅子の口より羊は兩足あるひの片耳を取かへし得る。れみサマリ  
 アに於て床の隅またの。ダマスコ錦の榻に坐するイスラエルの子

孫もろの救るふと。是のごとくならん。十三萬軍の神主エホバの  
 く言たまふ。汝ら聽てヤコブの家に證せよ。十四我イスラエルの諸の  
 罪を罰する日に。十五ベテル壇を罰せん。其壇の角の折て地に落べ  
 し。十五我また冬の家および夏の家をうたん。象牙の家はるび大さる  
 る家失ん。エホバこそを言ふ。

第四章

一

パシヤンの牝牛等

よ

汝ら

此言を

聽け

汝らは

サマリヤの

山お居り弱者を虐げ貧者を壓し又ろの主にむるひて。此お持きた  
 りて我らに飲せよと言ふ。二主エホバ己の聖を指し誓ひて云ふ。視  
 よ。日汝らの上に臨む、ろの日お人汝らを釣にかけ。汝等の遺餘者  
 を釣魚釣おかけて曳いださん。三汝らの各々ろの前なる石垣の破  
 壊たる處より奔出てハルモンに逃往ん。エホバこれを言ふ。四汝ら  
 ベテルに往て罪を犯え。ギルガルに往て益々おはく罪を犯せ。朝こ  
 とお汝らの犠牲を携へゆけ。三日ごとお汝らの什一を携へゆけ。五

酔い色たる者を感謝祭に獻げ願意よりする禮物を召てこれを告  
 示せイスラエルの子孫よ汝らの斯するを好むなりと主エホバ言  
 たまふまた我汝ら一切の邑あ於て汝らの齒を清からえめ汝  
 らの一切の處あれいて汝らの食を乏しからえめたり然るも汝ら  
 は我あ歸らずとエホバ言たまふまた我收穫までにい尙三月あ  
 るに雨をとどめて汝らあ下さずの邑にい雨を降しよの邑あ  
 雨をふらさざりき此田圃は雨を得彼田圃の雨を得ずして枯れた  
 りハ二三の邑別の一の邑に飢えきゆきて水を飲ども飽こどあた  
 りす然るも汝ら我あ歸らずとエホバ言たまふ我枯死穀と朽  
 腐穂とをもて汝等を撃あやませりまた汝らの衆多の園と葡萄園  
 と無花果樹と橄欖樹とい蝗これを食べり然るも汝ら我あ歸ら  
 ずとエホバ言たまふ我あんちらの中にエシプトに爲し如く疫  
 病をおこし劍をもて汝らの少き人を殺し又汝らの馬を奪さり汝

らの營の臭氣を去て騰りて汝らの鼻を撲しめたり然るも汝ら  
 我あ歸らずとエホバ言たまふ我あんちらの中の邑を滅ぼす  
 こどソドム、ゴモラを神の滅ぼしたまひし如くまたを汝らに火  
 焰の中より取いだえたる燃柴をさくあれり然るも汝らは我に  
 歸らずとエホバ言たまふイスラエルよ然らば我あ汝に行ん  
 我是を汝に行ふべけをイスラエルよ汝の神に會ふ準備をせよ  
 彼に即ち山を作りなし風を造り出し人の思想の如何あるを  
 の人に示しまた晨光をかへて黑暗とあし地の高處を踏む者あり  
 ろの名を萬軍の神エホバといふ  
 哀歎の歌なりニ處女イスラエルの休れて復起あがらず、彼に己  
 の地あ扑倒さる、之を扶け起す者あし三主エホバかく言たまふ  
 スラエルの家において前あ千人出たる邑は只百人のみのあり

前まへお百人出いたる邑まちの只ただ十人のみのみららん四よエホバのくイスラエ  
 ルの家いへお言いたまふ、汝おれら我われを求もとめよさらば生いべし五ごベテルを求もとむ  
 るなかき、ギルガルに往ゆなかきベエルシバに赴おもむく勿なれ、ギルガルの  
 必かならず據たもへらきゆきベテルの無なお歸きせん六む汝おれらエホバを求もとめよ然さら  
 ば生いべし恐おそらくの埃ほこを焼やかん、ベテルのごとくにヨセフの家いへに落おちくだりた  
 まひてろの火ひこれを焼やかん、ベテルのためふこれを熄けす者もの一人もあ  
 らじ七なな汝おれら公道おほやけを茵いん蔭えんに變へんじ正義たよしきを地ちに擲なつる者ものよ八や昂おほ宿しゆくおよ  
 び參さん宿しゆくを造つくり死あれ蔭かげを變へんじて朝あさとあし晝ひるを暗くらくして夜よるとあし海うみ  
 け水みづを呼よびて地ちの面おもてお溢あふささる者ものを求もとめよろの名なの埃ほこバとい  
 ふ九こ彼かれの滅ほろ亡びを忽たち然まち強つよ者ものに臨のぞましむ、滅ほろ亡びつひに城ある臨のぞむ十じ彼かれら  
 の門かどにありて勸い戒ましむる者ものを惡にくみ正直たよしきを言いふ者ものを忌い嫌きらふ十一じ汝おれらの貧ま乏う  
 き者ものを踐ふつけ麥あわの糞く物を之これより取とる、是これ故ゆえ汝おれらの鑿きり石いしの家いへを建た  
 しと雖いもろの中に住すことあらし美うしき葡萄ぶた園うを作つくりしと雖いども

ろの酒さけを飲のむことあらし我われ知る汝おれらの愆とがの多おほく汝おれらの罪つみの大おほい  
 り汝おれらの義たよしき者ものを虐あへた賄ま賂ひを取とり門かどにおいて貧ま乏うき者ものを推おし枉まぐ十三  
 是これ故ゆえ今いまれ時ときの賢かしこき者もの黙もくす是これ惡あしき時ときあきむあり十四じ汝おれら善ぜんを求もとめ  
 よ惡あくを求もとめざる然さらば汝おれら生いべしまた汝おれらお言いふこととく萬まん軍ぐんの神かみ  
 エホバ汝おれらと偕ともお在いまさん十五ご汝おれら惡あくを惡にくみ善ぜんを愛あいし門かどおて公た義よしを  
 立たてよ萬まん軍ぐんの神かみエホバあるひのヨセフ遺のこる者ものを憐あはれみたまはん  
 十六じ是これ故ゆえ主したる萬まん軍ぐんの神かみエホバかく言いたまふ諸あの街まち衢またにて啼なく  
 とあらん諸あの大おほ路ぢおて人ひと哀あはれ哉な哀あはれ哉な呼よべ又また農のう夫ふを呼よびたりて哀あはれ  
 哭なくしめ啼なく女を招まねきて啼なくしめん十七しちまた諸あの葡ぶ萄たう園うおも啼なくこと有あるべ  
 し其そのの我われ汝おれらの中なかを通とほるべけきありエホバを言いたまふ十八じ  
 エホバの日ひを望のぞむ者ものの禍わざはひあるかな汝おれら何なにとてエホバの日ひを望のぞむ  
 や是これ昏くらくして光ひかりあし十九じ人ひと獅子ししの前まへを逃のがれて熊くまお遇あひ又また家いへに  
 いりてろの手てを壁かべに附つて蛇へびに咬かまるゝに宛きも似にたり二十じエホバの日ひ

の昏くして光あく暗にして輝あき非ずや我の汝らの節筵を  
 惡みりつ藐視むまた汝らの集會を悦こむと汝ら我に燔祭また  
 の素祭を献るとも我こそを受納じ汝らの肥たる犢の感謝祭の我  
 これを顧みじ汝らの歌の聲を我前に絶て汝らの琴の音の我  
 色を聴じ言公道を水のごとくに正義をつきざる河のごとくに流  
 せしめよイスラエルの家よ汝らの四十年荒野お居し間犠牲と  
 供物を我お献げたりしや云かへつて汝らの汝らの神とする星おして  
 ひ汝らの偶像キウンを負へり是即ち汝らの神とする星おして  
 汝らの自ら造り設けし者あり然らば我汝らをダマスコの外お移  
 さん萬軍の神ととなふるエホバこそを言たまふ  
 一 身を安くしてシオンに居る者思ひおぼらぬずしてサマ  
 リヤの山に居る者諸の國おて勝れたる國の中ある聞え高くして  
 イスラエルの家に就きまたたがえる者禍あるかるニカル手に

渉りゆき彼處より大ハマラに至りまたペリシテ人のガテに下り  
 て視よ其等此二國お愈るや彼らの土地の汝らの土地よりも大  
 あるや汝等の災禍の日をもて尙遠と爲し強暴の座を近づけ  
 自ら象牙の牀に臥し寢臺の上に身を伸し群の中より羔羊を取り  
 園の中より犢牛を取て食ひ五琴の音においせて唱ひ噪ぎダビデ  
 のごとくに樂器を製り出し六大罽をもて酒を飲み最も貴とさ膏  
 を身に抹りヨセフの艱難を憂へざるあり七是故お今彼等の擄の  
 れて俘囚人の眞先に立て往んかの身を伸したる者等の嘯の聲止  
 べしハ萬軍の神エホバ言たまふ主エホバ已を指て誓へり我ヤコ  
 ブ誇る所の物を忌嫌ひるの宮殿を惡む我この邑とろの中お充  
 る者とを付すべし九一の家お十人遺りをるとも皆死んて而して  
 ろの親戚するあいち之を焚く者ろの死骸を家より運びいださんと  
 て之を取あげまたろの家のお奥お潛み居る者お向ひて他おなほ汝

どのもに居る者あるやと言ふとき對へて一人も無しと言ん此時  
 かの入また言べし黙せよエホバの名を口に擧ること有べからず  
 どと視よエホバ命を下し大ある家を撃て墟址とあらしめ小き家  
 を撃て微塵とあらしめたまふ馬わに能く岩の上を走らんや人  
 わお牛をもて岩を耕へすことを得んや然るに汝らの公道を毒に  
 變じ正義の果を茵蔯に變じたり汝らの無物を喜こび我等の自  
 分の力をもて角を得しあわらずやと言ふ苗是をもて萬軍の神エ  
 ホバ言たまふイスラエルの家よ我一の國を起して汝らお敵せ玄  
 めん是のハマテの人口よりアラバの川までも汝らをあやまさん  
 再び生ずる時あたりて彼蝗を造りたまふ草の王は刈た  
 る後に生じたるものあり二の蝗地の青物を食盡し後我言り  
 主エホバよ願く之赦したまへヤコブの小し争か立ふとを得ん  
 第三十章 主エホバの我に示したまへるところ是のごとし即ち草

三エホバの行へる事につきて悔をなし我これを爲しと言たま  
 ふ主エホバの我に示したまへる所是のごとし即ち主エホバ火  
 をもて罰せんとて火を呼たまひけを火大淵を焚きまた産業の  
 地を焚んとす時お我言り主エホバよ願く止たまへヤコブの  
 小し争か立ふとを得んとエホバの行へる事おつきて悔を  
 し我ふれをあさしと主エホバ言たまふ七また我お示したまへる  
 ところ是のごとし即ち準繩をもて築ける石垣の上にエホバ立ち  
 るの手に準繩を執たまふ八而してエホバ我にむかひアモス汝何  
 を見るやと言たまひけを準繩を見ると我答へしお主また言た  
 まいなく我準繩を我民イスラエルの中お設く我再び彼らを見過し  
 おせじ九イサクの崇邱の荒さをイスラエルの聖所お毀たれん我  
 劍をもちてヤラベアムに家に起むかんの時にてベテルの祭司  
 アマシヤ、イスラエルの王ヤラベアムに言遣りしけるのイスラエ

ルの家の真中にてアモス汝に叛けり彼の諸の言おの此地も堪る  
 あたのざるなり即ちアモスかく言りヤラベアム劍よりて  
 死んイスラエルと必ず擄へられてゆきてるは國を離れんと而  
 してアマシヤ、アモスに言ける先見者よ汝往てユダの地に逃れ  
 彼處にて預言して汝は食物を得よ然をベテルあての重ねて預  
 言すべあらず是の玉の聖所王の宮あればあり而アマス對へてア  
 マシヤに言ける我の預言者にあらすまた預言者の子にも非ず  
 我の牧者あり桑は樹を作る者なりと然るにエホバ羊を従ふ所  
 より我を取り往て我民イスラエルを預言せよとエホバわ色に宣  
 へり今エホバの言を聽け汝の言ふイスラエルあむかひて預言  
 する勿きイサクの家あむひて言を出すあかれと是故あエホ  
 バうく言たまふ汝の妻と邑の中にて妓婦となり汝の男子女子は  
 劍に斃る汝の地は繩をもて分たれん而して汝の穢たる地あ死イ

主エホバの我に示したまへるとある是のごとし即ち熟  
 したる果物一筐ありニエホバわれあむかひてアモス汝何を見る  
 やと言たまひけきバ熟したる果物一筐を見るときこたへしおエホ  
 バ我あ言たまひく我民イスラエルの終いたまひ我ふたふび彼ら  
 を見過しおせし主エホバ言たまふ其日おの宮殿の歌の哀哭に  
 變らん死屍あひたしくあり人これを過き處お投棄ん默せよ四  
 汝ら喘ぎて貧き者お迫り且地の困難者を滅ぼす者よ之を聽け五  
 汝らの言ふ月朔は何時過去んか我等穀物を賣んとす安息日は何  
 時過去んか我ら麥倉を開かんとす我らエバを小さくしシケルを大  
 くし偽の權衡をもて欺むく事をあし銀をもて賤しき者を買ひ  
 鞋一足をもて貧き者を買ひかつ屑麥を賣いださんと七エホバヤ  
 コプの榮光を指て誓ひて言たまふ我あらず彼等の一切の行爲

を何時までも忘るじハ之がために地震のざらんや地に住る者み  
 む哭かざらんや地とある河のごとく噴あがらんエシブトの河のご  
 とく湧あがり又沈まん主エホバ言たまふ其日には我日をして  
 眞晝に没せまめ地をして白晝あ暗くあらまめ+汝らの節筵を悲  
 傷お變らせ汝られ歌を盡く哀哭に變らせ一切の人お麻布を腰お  
 纏いしめ一切の人に頂を剃しめ其日をえて獨子を喪へる哀傷の  
 ごとくあらまめ其終をえて苦き日のごとくあらまめん主エホ  
 バ言たまふ視よ日至らんとするの時我饑饉を此國におくらん是  
 のパンお乏しきに非ず水に渴くに非ずエホバの言を聴ここの饑  
 饉あり十三彼らの海より海とさまよひ歩き北より東と奔まはりて  
 エホバの言を求めん然と之を得ざるべし十三ろの日おい美しき處  
 女も少き男もともに渴のため絶いらん十四かのサマリアの罪を  
 指て誓ひダンよ汝の神は活くと言ひまたベエルシバの路は活く

と言る者等ハ必ず仆れん復興ることあらじ

**第九章** 一 我觀るお主壇の上に立て言たまいく柱の頭を撃て鬨を

震いせ之を打碎きて一切の人の首に落かすらまめよ其遣れる者  
 を我劍をもて殺さん彼らの逃る者も逃おはするふとを得ず彼  
 らの遁る者もたすからじ=假令かれら陰府お掘くだるとも我  
 手をもて之を其處より曳いださん假令かれら天お攀のぼるとも  
 我これを其處より曳おろさん三假令かそらカルメルカルメルの巖に匿る  
 うとも我これを捜して其處より曳いださん假令かれら海の底に  
 匿れて我目を逃るうとも我蛇に命じて其處にて之を咬まめん四  
 假令かれらろの敵お擄られもくとも我劍に命じて其處おて之を  
 殺さまめん我かれらの上に我目を注ぎて災禍を降さん福祉を降  
 さし五主たる萬軍のエホバ地お擗きバ地鎔けるの中に住む者み  
 む哀む即ち全地の河のごとくお噴あがりエシブトれ河のおとく

おまた沈むあり六 彼の樓閣を天に作り穹蒼の基を地の上お置る  
 また海の水を呼て地の面おみれを樹ぐなり其名をエホバといふ  
 七 エホバ言たまふイスラエルの子孫よ我の汝らを視ことエテオ  
 ビア人を視ダごとくするにあらずや我のイスラエルをエシプト  
 の國よりベリシテ人をカフトルよりスリア人をキルより導き來  
 りしにあらずやハ視よ我主エホバの目を此罪を犯すところの  
 國お注ぎ之を地の面より滅ぼし絶ん但し我のヤコブの家を盡く  
 の滅ぼさじエホバこれを言ふ九 我すあち命を下し節にて物を  
 篩ふダごとくイスラエルの家を萬國中にて篩のん一粒も地に  
 落ざるべし十 我民の罪人即ち災禍わきらに及むず我らに降らじ  
 と言をる者等の皆劍によりて死ん十二 其日おの我ダビデの倒をた  
 る幕屋を興しその破壊を修繕ひろの傾圮たるを興し古代の日の  
 ごとくお之を建あはすべし十二 而して彼らのエドムの遺餘者およ

ひ我名をもて稱へらるる一切の民を獲ん此事を行ふエホバか  
 く言なり十三 エホバ言ふ視よ日いたらんとすその時に耕者刈  
 者に相繼ぎ葡萄を踐む者の播種者に相繼ぐまた山々に酒滴り  
 岡の皆鎔て流れん十四 我お民イスラエルの俘囚を返さん彼らの  
 荒たる邑々を建あはして其處に住み葡萄園を作りてその酒を飲  
 み園圃を作りてその果を食ん十五 我かれらをその地に植つけん  
 彼らの我おこれお興ふる地より重ねて拔とらるることあらず汝  
 の神エホバこれを言ふ

亞麼士書終

阿巴底亞書

一 オバデアの預言、主エホバエドムにつきて斯いひたまふ、我らエ  
 ホバより出たる音信を聞き一人の使者國々の民の中お遣はされ  
 て云ふ起よ我等起てエドムを攻撃んと我汝を去て國々の中お  
 いて小き者たらむ、汝は大に藐視らるゝあり、山崖の巖屋お  
 居り高き處に住む者よ、汝が心の傲慢あんちを欺むけり、汝心の中  
 お謂ふ誰の我を地に曳くだすことを得んと、汝たどひ驚のこと  
 くに高く舉り星の間お巢を造るとも我ろみより汝を曳くださん  
 エホバこそを言たまふ、五盜賊汝に來り強盜夜あんちに來り竊む  
 ともろの心に満るときに止ざらんや、嗚呼あんちは滅ぼさきて絶  
 や、葡萄を摘む者汝にいたるも尙幾何を遺さらんや、嗚呼エサ  
 ラの捜されろは隠しおける物の探りいださるセ、汝と盟約を結べ  
 る人々、いみあ汝を國境お逐やり、汝と和好をあせる人々、いみあ汝

を欺きて汝に勝ち、汝の食物を食ふ者等、汝の下を羅を設く、彼の中おの穎悟あらず、エホバ言たまふ當日に、我智慧ある者をエドムより絶除き、穎悟をエサウの山より絶除さざらんや、九テマンよ、汝の勇士の驚き懼れん、而して人みある終に殺さきてエサウの山より絶除あるべし、汝の兄弟ヤコブに暴虐を加へたるに、因て耻辱あんちを蒙らん、汝の永遠お至るまで絶るべし、汝が遠く離れて立をりし日、即ち異邦人これお財寶を奪ひ、他國人これが門に進み入り、エルサレムのために籤を掣たる日、おの汝も彼らの一人のごとくありき、十二汝の汝の兄弟の日、すあ、ちろの災禍の日を觀るべからず、又ユダの子孫は滅亡の日を喜ぶべからず、の難れ、日に汝口を大きく開べ、あらざるあり、十三我民の滅ぶる日、おの汝の門お入べからず、其滅ぶる日に、汝の患難を見べからず、又の滅ぶる日に、汝の財寶お手をうく可らず、十四汝路の辻

々お立てるの逃亡者を斬べ、あらず、其患難の日、これ汝が遺る者を付すべからず、十五エホバの日、萬國に臨むこと、邇し汝の爲せること、汝も爲られ、汝の應報あんちの首に歸すべし、十六汝等のわが聖山にて飲ま、おとく、萬國の民も恒に飲ん、即ちみる、飲かつ、啜りて、従前より有ざりし者のごとく、成ん、十七シオン山に、救はる者等、をりて、ろの山、聖所とあらん、またヤコブの家、のろの産業を獲ん、十八ヤコブの家、の火とあり、ヨセフの家、の火、燄とあり、エサウの家、の遺る者一人も、無にいたるべし、エホバこれを言なり、十九南に、人のエサウの山を獲、平地に、人のベリシテを獲ん、又、彼らに、エフライムの地、および、サマリアの地を獲べ、ニヤミンと、ギレアドを獲ん、二十、かれ、擄は、色ゆ、さし、イスラエルは、軍旅に、カナン人に、属する地を、ザレバテまで、取ん、セバラデにある、エルサレムは、俘擄人の南の、邑々を獲ん、三、然

る時に救者シオンに山お上りてエサウの山を鞫るん而して國は  
エホバに歸すべし

阿巴底亞書 終

米迦書

第一章  
一 ユダの王ヨタムアハズおよびヒゼキヤの代おモレシテ  
人ミカお臨めるエホバの言是するとちサマリアとエルサレムの  
事につきて彼お示さる者ありニ萬民よ聽け地とろの中のもの  
よ耳を傾けよ主エホバ汝らお對ひて證を立たよとん即ち主の  
聖殿より之を立たよふべしニ視よエホバの處より出てくだり  
地の高處を踏たまとん山に彼の下の融け谷に裂けたり火の前  
ある蠟のごとく、坡お流るゝ水のごとしニ是みなヤコブの愆の故  
イスラエルの家の罪のゆゑあり、ヤコブの愆とい何かサマリアお  
あらずや、ユダの崇邱とい何か、エルサレムにあらずやニ是故に我  
サマリアを野の石堆とるし葡萄を植る處と爲し又ろの石を谷に  
投おとしろの基を露さん七ろの石像のみる碎かれ、ろの獲たる價  
金のみる火おて焚れん、我ろの偶像をことく、く毀たん彼妓女の

價金よりこれを積たれば是れまた歸りて妓女の價金とあるべし、  
 我これがために哭き咄ばん衣を脱ぎ裸體にて歩行ん山犬の  
 どくに哭き駝鳥のごとくに啼ん九サマリアの傷の醫すべからざ  
 る者にてすでにユダに至り我民の門エルサレムあまでおよべり  
 ナガテに傳ふるあるれ泣さけふ勿れ、ベテレアフラにて我塵の中  
 に輾ひたりサビルに住る者よ汝ら裸にあり辱を蒙りて進みゆ  
 け、ザアナンお住る者の敢て出ず、ベテエゼルの哀哭によりて汝ら  
 の立處を得ずマロテに住る者の己の幸福につきて思ひなやむ、  
 其の災禍エホバより出てエルサレムの門に臨めをあり十三ラキシ  
 に住る者よ馬に車をつあげ、ラキシのシオン女の罪の根本あり  
 イスラエルの愆の汝の中お見ゆ十四あに故に汝モレセラガテに離  
 別の饋物を與へよ、アクシブの家々のイスラエルの王等おあける  
 こと人を欺く溪川のごとくあるべし十五マレシヤにすめる者よ我

また汝の地を獲べき者を汝に携へ往べしイスラエルの榮光アド  
 ラムお往ん十六汝の悦ぶところの子等の故によりて汝の髪を剃  
 おろせ、汝の首の剃し處を大きくして驚のごとくにせよ其の彼等擄  
 へらきて汝を離るれをなり  
 一ろの牀にありて不義を圖り惡事を工夫る者等にい禍あ  
 るべし彼らはろの手お力あるが故に天亮おあよべあれを行ふ  
 ニ彼らの田圃を貪りてあれを奪ひ家を貪りて是を取りまた人を  
 虐げてろの家を掠め人を虐げてろの産業をかすむ三是故にエホ  
 バかく言たまふ視よ我此族おむかひて災禍を降さんと謀る、汝ら  
 はろの頸を是より脱すること能はじまた首をあげて歩くよと能  
 んざるべし其時の災禍の時なればあり四ろの日に人汝らにつ  
 きて詩を作り悲哀の歌をもて悲哀て言ん事既にいたれり我等の  
 盡く滅ぼさる、彼わが民の産業を人に與ふ、如何あるを我よりこそ

を離すや我等の田圃を違逆者お分ち與ふ五然を汝らエホバの會  
 衆の中には籤によりて繩をうつ者一人も有と六預言する勿を彼  
 らの預言す、彼らの是等の者等にむひて預言せし、恥辱彼らを離  
 れざるべし七汝ヤコブの家と稱へらるる者よエホバの氣短から  
 んやエホバの行為是のごとくあらんや我言と品行正直者の益と  
 らざらんや八然るに我民の近頃起りて敵とあせり汝らの夫の  
 戦争を避て心配なく過るところの者等に就てるの衣服の外衣を  
 奪ひ我民の婦女をろの悦みふとるの家より逐いだしるの子  
 等より我の妝飾を永く奪ふ十起て去是の汝らの安息の地にあら  
 す是の己に汚れたれを必ず汝らを滅ぼさん其滅亡の劇りるべし  
 十一人もし風に歩と謊言を宣べ我葡萄酒と濃酒の事あつきて汝に  
 預言せんと言ふとあらばろの人のこの民の預言者とならん十三ヤ  
 コブよ我かならず汝をことく集へ必ずイスラエルの遺餘者

を聚めん而して我之を同一お置てポツラの羊のごとく成えめん  
 彼らの人數衆きおよりて牧場の中ある群のごとくにろの聲をた  
 てん十三打破者かれらに先だちて登り彼ら遂に門を打敗り之を通  
 りて出ゆかん彼らの玉ろの前にたちて進みエホバろの首に立た  
 まふべし

第三章

一我言ふヤコブの首領よイスラエルの家の侯伯よ汝ら聽

け公義は汝らの知べきあとに非ずやニ汝らの善を惡み惡を好み  
 民の身より皮を剥ぎ骨より肉を剔り三我民の肉を食ひろの皮を  
 剥ぎろの骨を碎きこれを切さざみて鍋に入る物のごとくし鼎の  
 中あいるる肉のごとくす四然を彼時に彼らエホバお呼のるとも  
 エホバかれらお應へたおのし却てるの時にの面を彼らに隠した  
 まいん彼らの行惡けきあり五我民を惑ひす預言者の齒にて嚙  
 べき物を受る時の平安あらんと呼ひきとも何をもちの口お與へ

ざる者にむかひての戰鬥の準備をあす、エホバ彼らにつきて斯い  
 ひたまふ。然らば汝らの夜に遭べし復異象を得じ黑暗に遭べし復  
 卜兆を得じ日りの預言者の上をいゝれて没りるの上の晝も暗  
 かるべし。七見者の愧を抱き卜者の面を赧らめ皆共にの唇を掩  
 りて能力身お満ち公義および勇氣衷お満きをヤコブあるの徳を  
 示しイスラエルにの罪を示すことを得。九ヤコブの家の首領等  
 およびイスラエルの家の牧伯等公義を惡み一切の正直事を曲る  
 者よ汝ら之を聴け。十彼らは血をもてシオンを建て不義をもてエ  
 ルサレムを建つ。十一の首領等の賄賂をとりて審判をなしるの祭  
 司等の値錢を取て教誨をあす。又の預言者等の銀子を取て占卜  
 を爲しエホバお倚頼みて云ふエホバわれらと偕に在すにあらす  
 や。然を災禍わきらお降らじと。十三是によりてシオンは汝のゆゑに

田圃となりて耕へされエルサレムの石堆となり宮の山の樹の生  
 まげる高處とあらん  
**第四章** 一 末れ日にいたりてエホバの家は山、諸の山の巔に立ち諸  
 の嶺にふえて高く聳へ萬民河のおどく之に流を歸せん。ニ即ち衆  
 多の民來りて言ん去來我等エホバの山お登りヤコブは神の家に  
 もあるんエホバ。ろれ道を我らお歎へて我らあるの路を歩ま。また  
 まとん律法のシオンより出でエホバの言のエルサレムより出べ  
 けきをあり。三彼衆多の民は間を鞫き強き國を規戒め遠き處おま  
 ても然。またまふべし。彼らの劍を鋤に打かへるの鎗を録に打  
 かへん。國と國との劍を擧て相攻す。また重て戰爭を習ひ。四 皆  
 の葡萄の樹は下に坐し。ろの無花果樹の下お居ん。之を懼を忘むる  
 者あるべし。萬軍のエホバの口おれを言ふ。五 一切の民のみな各  
 々の神の名によりて歩む。然ども我らお見れらの神エホバの名

によりて永遠お歩まん 六 エホバ言たまふ其日に我かの足蹇たる者を集へるの散されし者および我が苦志めし者を聚め七の足蹇たる者をもて遺餘民とあし遠く逐やらせたりし者をもて強き民とあさん而してエホバシオンの山おいて今より永遠おこ色ガ王とならん 八 羊樓シオンの女の山よ最初に權汝お歸らん即ちエルサレムの女の國祚あんに歸るべし九汝あにとて喚叫ぶや汝の中に王あさや汝れ議者絶果しや汝の産婦のおどく助勞て産め汝の今邑をを懐くあり 十 シオンの女よ産婦のおどく助勞て産め汝の今邑を出て野に宿りバビロンに往ざるを得ず彼處おて汝救われん 十一 エホバ汝をかしてにて汝の敵れ手より贖ひ取りたまふべし 十二 今許多の國民あつまりて汝おおしよせて言ふ願く之シオンの汚させんことを我ら目にシオンを觀てあぐさまんと 十三 然あがら彼らのエホバの思念を知らずまたろの御謀議を曉らすエホバ麥束を打場お

あつむるごとくに彼らを聚めたまへり 十三 シオンの女よ起てこあせ我あんちの角を鐵にし汝れ蹄を銅にせん汝許多の國民を打碎くべし汝かれらの掠取物をエホバに獻げ彼らの財産を全地の主に奉納べし

**第五章** 一軍隊の女よ今あんなち集りて隊をつくき敵われらを攻圍

杖をもてイスラエルの士師の頬を撃つ 二 ベテレへム、エフラマ汝のユダの郡中にて小き者あり然れどもイスラエルの君とある者汝の中より我ためお出べしろの出る事古昔より永遠の日よりあり 三 是故お産婦れ産おとすまで彼等を付しおきたまはん然る後ろの遺せる兄弟イスラエルの子孫とよもに歸るべし 四 彼のエホバの力お由りろの神エホバの名の威光およりて立てろの群を救ひ之を去て安然に居おめん今彼の大ある者となりて地の極おまでおよむん 五 彼の平和ありアツスリア人おまらの國お入

り我らの宮殿を踏あらさんとする時我等七人の牧者八人の人  
 君を立ててこそお當らん六彼ら剣をもてアツスリアの地を得るば  
 しニムロデの地の邑々をほろぼさんアツスリアの人我らの地に  
 攻いり我らの境を踏あらず時に彼らの手より我らを救はん七  
 ヤコブれ遺餘者の衆多の民の中に在ると人に頼ず世の人を候ず  
 してエホバより降る露の如く青草の上あふりしく雨の如くなら  
 んハヤコブの遺餘者の國々あをり衆多の民の中にをる様ハ林の  
 獸の中に獅子の居ることく羊の群れ中に猛き獅子の居ることく  
 あらんろの過るときに踏まかつ裂ことをあす救ふ者あし望ら  
 くん汝の手汝が諸の敵の上ああげらき汝がもろくの仇ことこ  
 どく絶れんことを+エホバ言たまふ其日に我なんちの馬を汝  
 の中より絶ち汝れ車を毀ち十二汝の國の邑々を絶し汝の一切の城  
 をことくく圯さん十二我また汝の手より魔術を絶ん汝の中おト

筮師無おいたるべし十三我あんちの彫像および柱像を汝の中より  
 絶ん汝の手にて作る者を汝重て拜むこと無るべし十四我また汝  
 のアセラ像を汝の中より拔たふし汝の邑々を滅ぼさん十五而して  
 我忿怒と憤恨をもてるの聽従はざる國民お仇を報いん

第十六章

一請ふ汝らエホバの宣まふところを聽け汝起あがりて山  
 の前に辯争へ、崗に汝の聲を聽まめよ二山々よ地の易ることあき  
 基よ汝らエホバの辯争を聽けエホバの民と辯争を爲しイストラ  
 エルと論ぜん三我民よ我何を汝にゐしとや何に於いて汝を疲勞  
 たるや我おむりひて證せよ四我のエンプトの國より汝を導きの  
 ぼり奴隸の家より汝を贖ひいだしモーセアロンおよびミリアム  
 を遣ひして汝お先だゝえめたり五我民よ請ふモアブの王バラク  
 グ謀りし事およびベオールの子パラムびてを應へし事を念ひし  
 ツテムよりギルガルおいたるまでの事等を念へ然らむ汝エホバ

の正義を知ん。我エホバに前に何をもちゆきて高き神を拜せん、  
 燔祭の物および當歲に積をもてるは御前にいたるべきか。七エホ  
 バ數千の牡羊、萬流に油を悦びたまらんか。我愆のためおわぶ長子  
 を獻かんか。我靈魂の罪のためお我身の産を獻かんか。八人よ彼さ  
 きお善事の何あるを汝お告たりエホバに汝お要めたまふ事唯  
 正義を行ひ憐憫を愛し謙遜りて汝の神ととも歩む事あらずや  
 九エホバの聲おむひて呼べる、智慧ある者はあんなの名を仰  
 ぶん汝ち笞杖および之をおくらんと定めし者お聴け。十惡人れ家  
 に猶惡財ありや詛ふべき縮小たる升ありや。十一我もし正からざる  
 權衡を用ひ袋に偽の碼子をいれおの争で潔からんや。十二の富  
 る人の強暴にて充ち其居民の謊言を言ひろの舌の口の中おて欺  
 むくみとを爲す。十三是をもて我も汝を撃て重傷を負せ汝の罪のた  
 めに汝を滅ぼす。十四汝の食ふとも飽す腹のつねに空あらん、汝の移

すともつひお拯ふもとを得じ汝お拯ひし者の我これ剣お付す  
 べし。十五汝の種播とも刈ることあらず橄欖を踐ともろの油を身お  
 抹ることあらず葡萄を踐ともろの酒を飲ことあらず。十六汝らハ  
 ムリの法度を守りアハブの家一切の行爲を行ひて彼等の謀計  
 に遵ふ。是れ我を去て汝を荒さめ且ろの居民を胡慮とあさめ  
 んが爲あり汝らハわぶ民に恥辱を任べし。  
 第七章 我の禍あるか。我の景況ハ夏の菓物を採る時のごとく  
 遺せる葡萄を斂むる時お似たり。食ふべき葡萄あること無く我が  
 心に嗜む初結の無花菓あること無し。善人地に絶ゆ、人の中に直  
 き者あし、皆血を流さんと伏て伺ひ。各々網をもてるの兄弟を獵る  
 三兩手の惡を善あすお急ごし。牧伯の要求め裁判人の賄賂を取り  
 力ある人の心の惡き望を言あらんし。斯共にろの惡をあさる  
 ひ合す。四彼らの最も善き者も荆棘のごとく最も直き者も刺ある

の正義を知ん。我エホバに前に何をもちゆきて高き神を拜せん、  
 燔祭の物および當歲に積をもてるは御前にいたるべきか。七エホ  
 バ數千の牡羊、萬流に油を悦びたまらんか。我愆のためおわぶ長子  
 を獻かんか。我靈魂の罪のためお我身の産を獻かんか。八人よ彼さ  
 きお善事の何あるを汝お告たりエホバに汝お要めたまふ事唯  
 正義を行ひ憐憫を愛し謙遜りて汝の神ととも歩む事あらずや  
 九エホバの聲おむひて呼べる、智慧ある者はあんなの名を仰  
 ぶん汝ち笞杖および之をおくらんと定めし者お聴け。十惡人れ家  
 に猶惡財ありや詛ふべき縮小たる升ありや。十一我もし正からざる  
 權衡を用ひ袋に偽の碼子をいれおの争で潔からんや。十二の富  
 る人の強暴にて充ち其居民の謊言を言ひろの舌の口の中おて欺  
 むくみとを爲す。十三是をもて我も汝を撃て重傷を負せ汝の罪のた  
 めに汝を滅ぼす。十四汝の食ふとも飽す腹のつねに空あらん、汝の移

樹の垣より惡し汝の觀望人の日すあち汝の刑罰の日いたる、彼らの中に今混亂あらん五汝ら伴侶を信ずる勿き朋友を恃むなるれ、汝の懷に寢る者にむりひても汝の口の戸を守れ六男子の父を藐視め女子の母お背き媳の姑お背あんの敵の家の者あるべし七我のエホバを仰ぎ望み我を救ふ神を望み俟つ、我神われに聽たまふべし八わぶ敵人よ我につきて喜ぶあかれ、我仆るれば興あぶる、幽暗お居バエホバ我の光とありたまふ九エホバわが訴訟を理し我ためお審判をおこるひたまふまで我の忍びてろの忿怒をかうむらん其の我これお罪を得たれをなりエホバの正義を見ん十且が光明に携へいだしたまそん而して我エホバの正義を見ん十一且が敵これを見ん、汝の神エホバの何處にをるやと我お言る者恥辱をかうむらん我かれを目お見るべし彼の街衢の泥のどくくに踏つけらるべし十二汝の垣を築く日いたらん其日に法の度遠く徙るべ

し十三ろの日にのアツスリアよりエジプトの邑々より人々汝お來りエジプトより河まで海より海まで山より山までの人々汝に來り就ん十三ろの日地のろの居民の故によりて荒とつべし是ろの行為の果報あり昔汝の杖をもて汝の民即ち獨離れてカルメルの中的林にをる汝の産業の羊を牧養ひ之をして古昔の日のどくバシヤンあよびギレアドおいて草を食は志めたまへ十五汝がエジプトの國より出來し日のどく我ふしぎある事等を汝にえめさん其國々の民見てろの一切の能力を恥ぢろの手を口にあてん、ろの耳の聾とあるべし七彼らの蛇のどくお塵を餌め地に匍ふ者のごとくおろの城より振て出で戰慄て我らの神エホバに詣り汝のため懼おそん十八何の神お汝に如ん汝の罪を赦しろの産業の遺餘者の愆を見過したまふなり、神の憐憫を悦ぶお故にろの震怒を永く保ちたまえ十九ふたふび顧みて我らを憐れみ我らの愆を踏

つけ我らの諸の罪を海の底に投志づめたまへん  
 汝古昔の日と  
 色らの先祖に誓ひたりしるの眞實をヤコブお賜ひ憐憫をアブラ  
 ハムに賜へん

米迦書終

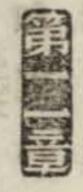
拿翁書

第一章

エホバは妬みかつ仇を報ゆる神  
 エホバの仇を報ゆる者また怒り  
 の主、エホバの己お逆らふ者に仇を報い己に敵する者にむかひて  
 憤恨を含む者あり  
 エホバの怒るよとの遅く能力の大ある者ま  
 た罰すべき者を必す赦すよとを爲さる者、エホバの道の旋風に  
 在り大風お在り雲の足の塵あり  
 彼海を指斥て之を乾かし  
 河々を玄てよとく涸志む、バシヤン  
 およびカルメルの艸木の  
 枯れレバノンの花の凋む  
 彼の前に山々ゆるぎ嶺々溶く、彼の  
 前に地墳上り世界およびろの中お住む者皆ふさあげらる  
 六誰  
 かのの憤恨お當ることを得ん誰かの燃る怒りに堪ることを得  
 其震怒のろくこと火のむとし農も之おためお裂く  
 エホバ  
 の善ある者にして患難の時  
 の要害あり彼己に倚頼む者を善知

たよふ、八 彼漲ぎる洪水をもてろの處を全く滅ぼし己敵する者  
 を幽暗處に逐やりたまひん九 汝らエホバに對ひて何を謀るや彼  
 全く滅ぼしたよふべし、患難かさねて起らじ十 彼等ひすびからま  
 れる荆棘のごとくあるとも酒に浸りをるとも乾ける藁のごとく  
 に焚つくさるべし十一 エホバに對ひて惡事を謀る者一人汝の中よ  
 り出て邪曲ある事を勸む十二 エホバの言たまふ彼等全くしてろ  
 の數夥多しかるとも必ず芟たふされて皆絶ん、我前あひんぢを  
 苦めたれども重て汝を苦めじ十三 いま我かさダ汝に負せし軛を碎  
 き汝の縛を切とあすべし十四 エホバの事につきて命令を下す汝  
 の名を負ふ者再び播るゝこと有じ汝の神々の室より我彫像およ  
 び鑄像を除き絶べし我汝の墓を備へん、汝輕ければあり十五 嘉音信  
 を傳ふる者の脚、山の上に見ゆ、彼平安を宣ふ、ユダよ汝の節筵を行  
 ひ汝の誓願を果せ、邪曲ある者重て汝の中を通らざるべし彼の全

く絶る



撃破者攻のぼりて汝の前あ至る、汝城を守り路を窺ひ腰  
 を強くし汝れ力を大に強くせよニエホバのヤコブの榮を舊に復  
 してイスラエルの榮のごとくしたよふ、其の掠奪者て色を掠めろ  
 紅に身を甲ふ、其行伍を立る時に戦車の鐵灼爍て火のごとし鎗  
 また閃めさふるふ四 戦車街衢に狂ひ奔り大路に推あふ、其形状火  
 炬のごとく其疾く馳ること電光れ如し五 彼られ將士を憶ひいだ  
 す、彼らんの途にて躓き仆れろれ石垣に奔ゆき大楯を備ふ六 河  
 々の門啓け宮消うせん七 彼の事定まれり彼の裸にせられて擄の  
 色ゆさろれ宮女胸を打て鴿のごとくに啼くべし八 二子べはろの  
 建し日より以來水の満る池お似たりしダろの民今逃奔る、止れ  
 止れと呼せも後を顧る者あし九 白銀を奪へよ黄金を奪へよろの

寶物限たからものかぎりあもろくく諸の貴たかとき器用夥多うちはものむだたし十滅亡ほろびたり空虚ひましくなれり荒果あははてたり心こころ之消きぬ膝ひざの慄ふるひ腰こしに凡すべて劇はげしき痛いたみあり面かほのな色いろを失うしなふ獅子ししの穴あな之何處いづこ不なや少わか獅子ししれ物ものを食くらふ處ところの何處いづこ不なや雄獅子おしし雌獅子めししの穴あな之何處いづこ不なや少わか獅子ししれ物ものを食くらふ處ところの何處いづこ不なや雄獅子おしし雄獅子おししの穴あな之何處いづこ不なや少わか獅子ししれ物ものを食くらふ處ところの何處いづこ不なや雄獅子おしし穴あなに充みしろの裂さき殺ころしる物ものをもて住すまか所に満みたる三萬軍さんまんにのエホバ言いたるまふ視みよ我われあんちに臨のぞむ我われあんちの戰車いくばくくるまを焚やきて煙けかりとなすべし汝なんぢの少わか獅子ししの穴あな之何處いづこ不なや少わか獅子ししれ物ものを食くらふ處ところの何處いづこ不なや雄獅子おしし絶たべし汝なんぢの使つかひ者しやの聲こゑかさねて聞きゆること無ならん充みち掠かすめ取とること息やすすニ鞭むちの音おとあり輪わの轟とどろく音おとあり馬うまの躍たどり跳はね車くるまの輾こり行ゆく三騎兵さんきへい馳はせのぼり劍つるぎさらめき鎗やりひらめく殺ころさる者もの夥多おほたしくあて死屍山しかばねやまを爲なし死骸限しかがいあし皆死屍みなしかばねに躓つまずきて倒たふる四

是こゝの魔術まじゆつの主ぬしある美うつくしき妓女おとこめ多く淫行いんかうを行おこなひろの淫行いんかうをもて諸國しよこくを奪とひろの魔術まじゆつをもて諸族しよぞくを惑まどしたるに因よてあり五萬軍ごまんにのエホバ言いたまふ視みよ我われあんちに臨のぞむ我われあんちの裳裾おそそを掲かげて面おもての上うへにまで及およびし汝なんぢの陰所かげしどころを諸民しよたみんに見まし汝なんぢの羞はづる所ところを諸國しよこくに見ますべし我われまた穢けがらはしき物ものを汝なんぢの上うへに投なり投なり加くわけて汝なんぢを辱はづかめ汝なんぢをして糞物かものとあらしめん凡すべて汝なんぢを見みる者ものとみみる汝なんぢを避さひて奔はり去さりニ子こべに亡なびたりと言いふ誰たれか汝なんぢのため哀あはれかんや何處いづこよりして我われあんちを弔なぐさむ者ものを尋たづね得えんや汝なんぢあにノアモンに愈よらんやノアモンの河々かはの間あひだに立たち水みづをろの周圍まはりに環めぐらし海うみもて壕ほりとあし海うみをもて垣かきとあせりたかつろの勢力ちからたる者もののエテオピア人ひあにんあよびエシブト人えしぶとにんあどにして限かぎあらずフテ人ふてにんルビ人るびにん等汝らを助たすけたりき然しかるに是こゝも俘囚とりことありて擄さらはれてゆきろの子こ女めの一切すべの衢ちまたの隅々すみずみに投なげられて碎くだけ又またろの尊貴者たうきせきしやの籤くじにて分わか

たれ其大なる者のみみる鍵に撃がれたり十二汝もまた醉せられて終  
 に隠匿ん汝もまた敵を避て逃るる處を尋ね求めん十三汝の城々の  
 みる初お結びし果のあれる無花果樹のごとし之を撼おせざるの  
 果落て食いんとする者の口に在る十三汝の中にある民の婦人のご  
 とし汝の地の門のみみる汝の敵の前に廣く開きてあり火あんちの  
 關を焚ん十四汝水を汲て圍まるる時用の備へ汝の城々を堅くし  
 泥の中お入て礎て石灰を作りかつ瓦燒密を修理へよ十五其處にて  
 火汝を焚き劍あんちを斬ん其なんちを滅ぼすこと吸蝗のごとく  
 あるべし汝吸蝗のごとく數多からば多かき汝群蝗のごとく數多  
 からば多うれ十六汝のあのれの商賈を空の星よりも多くせり吸蝗  
 掠めて飛さるる十七汝の重臣の群蝗のごとく汝の軍長の蝗の群の  
 とし寒き日に恒に巢窟を構へ日出きたるを飛て去るるの在る  
 處を知る者あし十八アツスリアの王よ汝の牧者の睡り汝の貴族の

臥す又なんちの民の山々に散さる、之を聚むる者あし十九汝の傷の  
 愈ること無し汝の創の重し汝の事を聞およぶ者のみみる汝の故お  
 よりて手を拍ん誰う汝の悪行を恒に身に受ざる者やある

哈巴谷書

第一章 預言者ハバククが示を蒙りし預言の重負ニエホバよ我

呼ひるに汝の我に聴たまひざるよと何時までぞや我あんぢにむ

かひて強暴を訴たふれども汝の助けたまひざるあり三汝何とて

我の害悪を見せたまふや何とて艱難を瞻望居たまふや奪掠およ

び強暴わが前に行ひる、且争論あり闘諍おてる四是およりて律法

弛み公義正しく行ひれず、悪き者義き者を圍むが故に公義曲りて

行なひる五汝ら國々の民の中を望み觀、駭ろけ駭ろけ、汝らの日に

我一の事を爲ん、之を告る者あるども汝ら信ぜざらん六視よ我カ

ルデア人を興さんどす、是するあち猛くまた荒き國人にして地を

縦横に行めぐり己の有らざる住處を奪ふ者あり七是は懼るべ

く又驚くべし其是非威光は己より出づ八ろの馬は豹よりも迅く

夜求食する豺狼よりも疾し、其騎兵と跑まてる即ちろの騎兵は遠



其等の民みよる諺語をもて彼を評し嘲弄の詩歌をもて彼を諷  
 せざらんや即ち言ん己に屬せざる物を積累ぬる者の禍なるか  
 斯て何の時にもまでおよむんや嗟かの質物の重荷を身お負ふ者よ  
 汝を噬む者おはかお興らざらんや汝を惱ます者醒出ざらんや  
 汝の之に掠めらるべし汝衆多の國民を掠めしに因てるの諸の  
 民の遺れる者なんぢを掠めん、是人の血を流しよお因るまた強暴  
 を地上に行ひて邑とろの内に住る一切の者とお及ぼせしお因  
 るなり災禍の手を免ぎんがために高き處に巢を構へんとして  
 己の家不義の利を取る者の禍なるあり汝の事を圖りて己の  
 家に恥辱を來らせ衆多の民を滅して自ら罪を取りし石垣の石叫  
 び建物の梁これお應へん血をもて邑を建て惡をもて城を築く  
 者の禍あるかな十三諸の民の火のためには勞し諸の國人の虚空事の  
 ためお疲る、是の萬軍のエホバより出る者あらずや十四エホバの榮

光を認むるの知識地上に充て宛然海を水の掩ふが如くあらん  
 人お酒を飲せ己の忿怒を酌和へて之を酔せ而して之が陰所を見  
 んとすする者の禍あるかな十六汝の榮譽に飽すして羞辱お飽り汝も  
 また飲て汝の不割禮を露とせ、エホバの右の手の杯汝に巡り來る  
 べし汝の汚るべき物を吐て榮耀を掩えん十七汝おレバノンに爲たる  
 強暴と獸を懼れえめしろの殲滅どの汝の上には報いきたるべし、是  
 人の血を流えしに因りまた強暴を地上に行ひて邑とろの内お住  
 る一切の者とお及ぼえしに因るあり十八雕像の作者て色を刻  
 みたるとして何の益あらんや又鑄像および偽師の語の偶像な色  
 ばろの像の作者て色を作りて頼むとも何の益あらんや十九木にむ  
 かひて興ませと言ひ、語のぬ石にむりひて起たまへと言ふ者の禍  
 あるか、是はお教誨を爲んや視よ是の金銀を着せたる者にてろ  
 の中おの全く氣息あし二十然りとはいへどもエホバの聖殿に在

ますろかし、至地ろの御前お黙すべし  
**第二章** シギヨノテお合せて歌へる預言者ハバククの祈禱、ニエ  
 ホバよ我あんなちの宣ふ所を聞て懼るエホバよこの諸の年の中間  
 に汝の運動を活潑かせたまへ、此諸の年の間に之を顯現したまへ、  
 怒る時にも憐憫を忘きたまひざきニ神テマンより來り聖者バラ  
 ン山より臨みたまふ、セラ其榮光諸天を蔽ひ、其讚美世界に徧ねし  
 四ろの朝耀の日のごとく光線ろの手より出づ、彼處ろの權能の  
 隠るる所あり五疫病ろの前に先だち行き熱病ろの足下より出づ  
 六彼立て地を震とせ、觀まひして萬國を戰慄おめたまふ、永久の山  
 の崩れ、常磐の岡の陷いる、彼の行ひたまふ道の永久ありセ我觀る  
 にクシヤンの天幕の艱難お雇りニデアンの地の幃幕の震ふハエ  
 ホバよ汝の馬を驅り、汝の拯救の車に乗たまふ、是河にむかひて怒  
 りたまふあるの、河にむかひて汝の忿怒を發したまふあるか、海に

ひろひて汝の憤恨を洩したまふあるか、汝の弓の全く囊を出で  
 杖の言をもて言のためらる、セラ、汝の地を裂て河とあしたまふ  
 山々汝を見て震ひ洪水溢色わたり淵聲を出してろの手を高く舉  
 ぐ十二汝の奔る矢の光のため汝の鎗の電光のごとき閃爍のため  
 日月ろの住處に立とままる十二汝の憤得りて地を行めぐり、怒りて  
 國民を踏つけたまふ十三汝の民を救んとて出きたり汝の膏沃  
 ける者を救とんとて臨みたまふ汝の惡き者の家の頭を碎さろの  
 石礎を露にして頸およぼしたまへり十四汝の彼の鎗をもてるろの  
 將帥の首を刺と得したまふ、彼ら我を散さんとして大風のごとく  
 に進みきたる、彼ら貧き者を密に吞ほろぼす事をもてるの樂と  
 す十五汝の汝の馬をもて海を乗と得り大水の逆巻ところを涉りた  
 まふ十六我聞て腸を斷つ、我唇ろの聲あよりて震ふ、腐朽わが骨お入  
 り我下體わろく、其の我患難の日の來るを待をあり、其時お即

ところ此民が攻寄る者ありて之に押逼らん  
 樹の花咲す、葡萄の樹に果あらず、橄欖の樹の産の空くあり田圃  
 の食糧を出さず園に羊絶え小屋に牛あかるべし然あがら  
 我のエホバによりて樂みわが拯救の神によりて喜べん主エ  
 ホバの我が力おして我足を鹿のこどくあらしめ我をえてわが高き  
 處を歩まゑめたまふ○伶長これを我琴にあのすべし

此の民は我に攻寄る者ありて之に押逼らん  
 樹の花は咲かず葡萄の樹に果あらず  
 橄欖の樹の産は空くあり田圃の食糧は  
 出さず園に羊絶え小屋に牛あかるべし  
 然あがら我のエホバによりて樂みわが  
 拯救の神によりて喜べん主エホバの  
 我が力おして我足を鹿のこどくあらしめ  
 我をえてわが高き處を歩まゑめたまふ  
 ○伶長これを我琴にあのすべし

哈巴谷書 終

DEC 20 1947

95-91144

立教大学図書館



95-91144